

21世紀の子育て

職業柄、たくさんの子どもに接してきましたが、人を育てるといことは、その子にないものを引き出すというよりは、その子らしさというものを大事にする、ということではないかと私は思っています。その子らしさが肥やしになっていく、ということ、大人になった多くの教え子たちから私は学びました。

玉川大学教育学部教授 **大豆生田啓友**

Hiroto Onameuda

日々の家事と子育てに携わって分かったこと

私は大学院で幼児教育を専攻し、幼稚園でも働いてきました。そして、結婚して親になり、自分の子どもを育てる立場になった時、どんなに良いお父さんになるだろう、と自分では思っていました。しかし現実は一言、「こんなはずじゃなかった」。30代前半、その頃の私は、子育て相談会と題する講演会へ全国、あちこち回っていました。働き盛りで、帰宅は遅くて不規則。全てを妻に任せきっていました。学者として、講演者として、皆さまにお話ししていることと日々の自分の行動とは、全く異なっていたのです。

それに気付いた私は、生活を改めることにしました。実際に日々の家事と子育てに携わってみて分かったのは、子育てしながら家事をこなす女性の大変さを、男性側は意外と知らないということでした。

今の私には、その大変さが分かります。幼児教育の専門家としての私、子ども好きの私でさえ、しかもかわいいわが子に、そのわが子の態度にイラッとすることがあったのですから。私は、自分の教育論について専門的に深めてきた理論と、現実の日々はあまりに異なっているのではないかと

と考えさせられました。

子どもを育てることについて、このような話をすると、涙を流されるお母さんがたくさんおられます。「子育ては大変ですか?」と聞くと、「大変です!」「それならどうして誰かを頼らないのですか?」と聞くと「子育ては母親の責任ですから」えっ、お母さん一人でそんなに抱えてるなんて。「いやいや! 子育てはあなた一人の責任じゃないから!」「いいえ、子育てがうまくいかないのは、母である私のせいですから」「いや、違います。お母さんだけの責任じゃありません。お父さんにも責任がありますから。助けて、と言いましょよ」

しかし、振り返れば17、18年前、幼稚園の教員をしていた時代、私は実にひどいことを言っていたものです。「お母さん頑張ってください。子育てはお母さん次第です。お母さんがどう育てるか、この子の良さが決まりますから」

幼児教育には母親が大事、という面があることは否定できません。でも今の時代の子育ては、お母さん一人だけでは無理。自分でわが子の子育てをしてみても、本当によく分かりました。

それから10年間、私は専門家として幼児教育を教えることを休みました。その間、私の妻と仲間たちが地域で、ささやかな子育て広場をつくりました。また、行政による子育て支援センターなどがなかった時代のことです。

スタートして2年後、厚生労働省の役人がたくさん来訪し、「このような施設を日本中に1万カ所つくりたい」と言われました。一人で困っていないで、同じ悩みを抱えた者同士で集まり、地域でその悩みを解決していこう、という試みです。



早期学習は人を幸せにする？

私はNHKのEテレ「すくすく子育て」に出演しています。この番組でも話していますが、日本中の幼児教育が変わってきています。

今までの考え方は、乳幼児期に、早くに多方面に勉強させていけば、その子の将来により役に立つというものでした。3歳までに施したことが人生の根幹になると。

大きなウソです。研究者として、分かってきた最新の情報をお伝えします。実は、乳幼児期に文字遊びをさせたり、数を覚えさせたりして、早くからいろいろ学習してきた子どもと、特に何もしなかった子どもとを、小学校に入ってから調べたら、両者は同じだったのです。世界中でそうした事例が報告されています。

そして学界で今、話題になっているのは、小さい頃に目に見えない心や社会性を育てた子の方が、その後、大人になってからの幸福度、社会的経済力が、全て高かったということです。ですから、文部科学省も厚生労働省も、早くから勉強させる幼児教育ではなく、体を育て、遊ぶ教育を大事にしましょう、という指針を改めて出しました。

日本は今、まずいことが起こっています。学力問題です。学力には、A問題型の学力とB問題型の学力があります。A問題型学力は主に暗記力、ペーパーテストで測れる学力、これまで進めてきたテスト方式の学力ですね。世界的視野では今、この型の学力は注視されません。役に立たないからです。

© iStock.com / recep-bg

これからの世界はB問題型の学力が重視されます。B問題型の学力とは「問題解決力」です。自分で考え、暗記では出せない答えを導き出す学力、探究する力です。「これってどうなっているんだらう?」というとき、その問題を解決していく学力、調べる力があることが大切になっています。

それは、「これどうする?」「こうしたらいいんじゃないかな」というように、人と会話して物事を解決する力のことでもあります。考えたことを人に正しく伝える、プレゼンテーション能力も必要です。確かに、全て現場で使える学力ですよね。これから、日本の学校教育は子どものもっと主体性を重視する、B問題型の学力重視に変わります。授業の形も変わります。いわゆる「アクティブ・ラーニング (Active learning)」子どもが能動的に学べるような授業を行う学習方法が、既に始まっている学校もあります。具体的にはディベート、グループディスカッションなどですが、考えて問題解決できる、高い会話力を身に付けることが求められています。

そのスタートが幼児教育です。幼児期のアクティブ・ラーニングは遊びです。幼児教育は遊んでいるだけ、と見られがちですが、遊びの中で自我を育てているのです。

テレビ番組で、タレントのくわばたさんらと一緒に遊んだ時、忘れられないことがありました。その時のテーマは「イヤイヤ期」。番組では、子どもが家で駄々をこねているとき、放っておいていいかどうか、マルかバツかで答えよ、という議論になりました。私は内心、マルかバツかで答えられることじゃないよ、と思いつつも、放っておいていい、マル、と回答しました。

すると、くわばたさんの顔が変わり、怖い顔でかみつくように言いました。「先生、今、マルって出しましたよね。じゃあ、こんなのどうですか? 本当に仕事が忙しかった時、子どもが何に對してもイヤイヤ、と言うので、『うるさい! 勝手にして!』と、怒鳴ってしまいました」

幼児教育専門家としては「怒鳴る」というのはどうか、となります。けれども、この場合は普通の親子の、日々の中での会話です。僕は「全然、問題ではないですよ。子育てしていて、いつも笑顔で『いいよ、いいよ』と言ってられるわけないでしょう。親だって人間です。昔から、そんなことも含めて、人は育ってきているのですから」と、つい本音を言っていました。

そうしたらくわばたさん、10分くらい泣き続けてしまったのです。びっくりしました。番組を中断するのか? いや、そのまま放送。この後、番組にも、彼女のブログにも、あふれるほどの視聴者の声が寄せられました。今、子育てしているママたちから、かつて子育てしていたママたちから。

そのほとんどが「くわばたさん、ありがとう。救われました。私も子どもが大好きで、いつも笑顔で接していたのに、つい大声で怒鳴ったり、かっとなって言わなくていいことまで言ってしまった。その後、なんてダメな母親なんだ、と落ち込む。他の人はできているのに、自分だけがダメなんじゃないかと思っていました」

いやいや、皆さん、頑張っておられます。それなのに、まず自分を責める。私は、このくわばたさんとの番組から改めて、大事なことを教わりました。子育て番組で僕らがするべき本当のことは、親がもっと元気になるような働き掛けをしていく

ことなんだ、と。

誤解のないように補足しますが、自然な感情のままに子どもに對応することがいい、というわけではありません。その後が大切です。感情的になつて子どもを怒鳴っても、その後「本当はあなたが大好き」と伝えるのです。そうすれば子どもにちゃんと気持ちは伝わります。このことも研究で分かっています。

子育て中のお母さんたちからは、こんな話も聞きます。「うちの子、保育園ではいい子なのに、家に帰ってくると……私の育て方が悪いからでしょうか?」

いえ、むしろその子は、社会と家庭の区別ができています。子どもも保育園や学校で頑張っています。当然、くたびれて家に帰ってくるに決まっています。そのとき、お母さんが甘えられる場所だったら、八つ当たりして発散できるのです。つまり、その子はお母さんを信頼しているということです。子育てできていないどころか、むしろその逆ですよ、ということ。

さらに、この2歳前後のイヤイヤ期、反抗期とも言いますが、これは反抗しているのではないのです。この時期は、「一人でできるもん」と自分で思い始める時なのですが、実際はまだ一人ではできません。だからイライラしてなんでもイヤ、と言いだすのです。脳科学の専門家によると、この時期は人としてまだ前頭前野が育っていないから、感情のコントロールができない状態なのだという説明が行われています。

それでも、お母さんたちからは「私たちのように、働きながら子どもを育てる時代ではなかった昔の親は、もっと子どもに向き合っていたので

は？」という声が上がります。これに対し私は、マンガ『サザエさん』の時代と今の子育ては違いますよ、という説明を行っています。

サザエさんは昭和初期のお母さんです。彼女は本当に、一人っ子タラちゃんに一人ですつと向き合っているでしょうか？ いいえ、タラちゃんには、おじいさんとおばあさんが付いています。この二人が大きな戦力です。

昔から、お母さん一人ですつと育てていた時代など一度もありません。人類学の研究者たちがずつと言い続けていることです。「人間、ホモ・サピエンスの特徴は、群れで飼育をすることである」と。しかし戦後、現代社会では母親一人が子育てすることになってしまいました。誰が子育てしても、一人では困難に決まっています。

そして、サザエさんの夫・マスオさんも子育てに参加しています。江戸時代にさかのぼって文献を調べてみても、夫は子育てに参加しているのです。幼い時から父親が子どもと遊ぶことは、子どもにも、妻（母親）にも、父親本人にとっても重要だということも分かっています。

さらにタラちゃんの時代は、外で一日中、遊んでいました。ですからいっばい自然に関わり、異なった年齢の子、家庭外の人と触れ合って育っていったのです。

また、タラちゃんは隣の伊佐坂先生の家へ勝手に上がり込みます。今、皆さんの身の回りで、子どもが勝手にお邪魔できる環境がありますか？ これはおそらく、日本中からなくなっています。

つまり、子育てはかつて大家族と大自然と、そして近所と共に行われていたということです。今のママたちが子育てを大変と感じているとすれ

ば、いろいろな支えが得られないことに一因があるのではないのでしょうか。

昔々、ホモ・サピエンスだけが、見知らぬ他者に食べ物分け与えました。だからこそ、ホモ・サピエンスだけが生き残ってきた、というのが今の学説です。そう考えると、子育てを今後も存続していくためには、皆が、小さな子を育てている人たちに声を掛けていくことが大切になります。

私が今関わっている横浜の子育て支援団体には、多くの高齢者の方がボランティアで参加してくださっています。お礼を申し上げると、たいいていの方が「いえいえ、赤ちゃんを抱っこさせてもらって、ありがたいのはこっちですよ」とにこにこしておっしゃってくださいます。

ロータリーの皆さまや、私の世代もまだそうだったのですが、男性は外で働くだけ、という人生を過ごしてきました。社会構造がそのスタイルを求めた世代です。そこに、今の社会が求めているのが、高齢者の方たちによる子育て支援、それと男性の力を借りたいということ。国を挙げて動きだしてもいます。

その子のその子らしさが肥やしになってくる

さて、この私、幼稚園の時に不登園になり、小学校も不登校で休みがちで過ごしました。けれども、意外と自己肯定感は低くありません。それは幼い頃に楽しかった、幸せだったな、という思い出を持つているからだと思っています。

私が中学生の時、両親は離婚して私は母子家庭で育ちました。しかも、生活保護を受けていました。当時は父を恨みましたし、たまに行く学校ですから成績も悪かったのですが、テレビ番組「3年B組金八先生」に救われていました。そして「こんな先生に出会っていたら、僕違ったかも。学校の先生になりたい」と思ったのです。

これを母に話すと「いいんじゃない、向いているわよ」。母の言葉にも、救われました。後には、国立大学の教育学部を受験するのですが、2回、失敗しました。諦めて就職したのですが、やはり諦め切れなくて夜の大学へ行きました。青山



■ 玉川大学教育学部教授
大豆生田啓友

1965年 栃木生まれ。89年 青山学院大学文学部教育学部卒業。91年 同大学大学院教育学専攻修了。青山学院幼稚園、関東学院大学などを経て現在、玉川大学教育学部教授。専門は乳幼児教育学、保育学、子育て支援。著書に『ママ先生が伝える幸せ子育てのコツ』赤ちゃんとママ社、2014年、『子育てを元気にすることばーママ・パパ・保育者へ』エイデル研究所、17年、など著書・論文多数。
NHKテレビ番組「すくすく子育て」に専門家として出演し、温かくも親にとって気付きのあるコメントが人気。
2男1女の父。

学院大学の夜間です。そこで、小学校と幼稚園の先生の免許を取って、最終的には青山の幼稚園の先生になりました。

何が、こんな私の人生を支えてくれたのか。振り返ってみると、一つは小さい頃、自分がしたいと思う遊びをあんなに夢中でできたこと。もう一つは母親。常に、あなたはあなたらしくていい、と私を認め続けてくれた人がいたことによつて、僕は僕でいい、と思えるようになりました。

幼い時に何に出会い、どういう人に出会ったのが後々まで、自分の人生にこれほど影響を与えているのか、ということに気がきます。もし、今日の私の話を聞いて、自分の子どもには小さい頃、そのように対応してこなかったな、と思われましたら、今からでも遅くありません。人は幼児期教育だけでは決まりません、人は生涯かけて育つということが、最近の発達心理学の研究により、分かっています。今からでもできることはいっぱいあります。

こんなことを、ある作家さんにお話ししたところ「僕、それ分かります」と言われました。「保育園の頃から学生時代、今もずっと一緒なんです。もの感じ方が。保育園時代の延長のままなんですよ。小説書いている時も面白がって書いていました。それが芥川賞につながったんですよ」

大人になっても大事なことの一つは、子どもらしさを失わないことです。これは幼稚、という意味ではありません。子どもらしさとは何か。それは、大人になってもいろいろなこと夢中になったり、興味・関心を持つたり、わくわくしたりできることです。ポジティブな大人って、魅力的ですよ？

幸せな子どもを育てる 四つの因子

幸せな子どもを育てる四つの因子というのが、慶應義塾大学の前野隆司先生の2016年の論文で紹介されています。

一つ目は「やってみよう」因子。自己実現、自分が社会に役立っている感じがあるかどうか。「やってみよう」という主体性が、小さい頃から大事にされている子どもは、その後、幸せになる可能性が高い。

二つ目は「ありがとう」因子。愛されている実感、人に感謝し親切にしたいという思い、「ありがとう」という気持ちがあるかどうか。

「ありがとう」という気持ちはどうしたら育つかというと、人から愛された子に備わります。人から「あら、すてきね」と言われて育つた子どもは、自分がされたように、人にもそのまま接します。このことは、幼児の心理発達研究からみても明らかになっています。

三つ目は「何とかなる」因子。楽観的で気持ちの切り替えができる。大人になっても、何とかなる、と思える人は、何とかなってしまふものです。

四つ目は「あなたらしく」因子。「あなたは、あなたらしさがすてきなのよ」と言われて育つた人は、自己肯定感が育ちます。今、日本の子どもたちの最大の問題は自己肯定感が極めて低いことです。自分でダメな人間だと思う、と答えている中高生は7割います。

自己肯定感がある子どもはどうしたら育つでしょうか。その子らしさが大事にされる、自分が

やりたいことを夢中でできること、うまくいかないことも、遊びの中で乗り越えられること、こういうことが大事にされてきた子は、幸せに育つのではないかと、今の研究で言われています。

そして、もう一つ、他に大事なことがあります。機嫌の良い母親の方が、子どもに良い成長を促す、というフィンランドでの研究があります。親の機嫌が良いと、自然と子どもの気持ちを受け入れるようになるので、子どもの情緒的な成長に良い効果を発揮することが明らかになりました。この研究成果を生かしたこともあるのかもしれないが、フィンランドの産前産後の子育て支援政策は、とても手厚いことでも知られています。

現代日本社会の中で生きているお母さんたちはまず自分を責めてしまい、頑張りすぎです。自分をほめ、自分らしく、子育てをする方がよいのです。心理学では Good Enough Mother というのですが、「ほどほどの母親」が良いのです。

ママも、自分の時間が大切。つまり、父親が子育てや家事にもっと積極的に関わらないと。そうすれば妻は精神的に落ち着くし、明らかに子どもも社会性が育ち、コミュニケーション力が高くなるといわれています。自身と家族を大事にする姿勢は、自分の人生を豊かにすることが分かっています。21世紀後半の社会では、子どもたちの笑顔が大事になります。大人が「子どもっていいよね」と楽しく語れる国であるならば、この国は、もっと発展するだろうと思っています。

子育てに多くの人の力を集めることが大切。この国の親も楽しんで、保育園の先生も楽しんで、皆で子育てしましょう。子どもはその子らしく、私は私らしく。

(ホスト 諏訪大社RC)